

2008年 迎春

大隈議長新春インタビュー



第1137・1138号
2008年
1月1日
定価1部600円
定期購読
半年 5400円
1年 10000円
振替番号
00140-5-95121

日本労働党中央委員会
発行所
労働新聞社
編集発行人
高橋 信
本社 〒102-0072
東京都千代田区飯田橋4丁目
1-5 ボザール飯田橋2階
電話 03-3265-6506(代)
FAX 03-3265-6507
北海道支社 〒001-0022
札幌市北区北22条西5丁目
1-13
電話 011-600-3232
東北支社 〒982-0003
仙台市太白区郡山7-10-10
ファンシー戸田A-102
関西支社 〒550-0011
大阪市西区阿波座1-11-18
昭和和本ビル308号
電話 06-6532-0780
九州支社 〒812-0042
福岡市博多区豊1-3-8-302
電話 092-483-1344

労働党ホームページ
<http://www.jlp.net/>
Eメールアドレス
shinbun@jlp.net

お知らせ

本年もよろしくお願いたします
本号は新年特別号として、旧年の12月25日号と1月5日号の合併号です。なお、1月15日号と1月25日号は合併号として1月25日に発行します。

労働新聞編集部

激動の二〇〇八年の幕開けに際し、「労働新聞」編集部は、日本労働党中央委員会議長である大隈鉄二同志に新春インタビューを行った。議長は、昨年一年を振り返り、米帝国主義の急速な衰退など国際情勢の特徴、およびサブプライムローン問題を契機としてあらわになった現代資本主義の問題、さらにはわが国野党の状況などについて、縦横に語った。さらに、労働運動を中心とする国民運動の発展と、そのために労働党の建設を急ぐことを呼びかけた。紙面の都合で一部を割愛せざるを得なかったが、以下、掲載する。(聞き手、大嶋和広・本紙編集長)



新春に際し、縦横に語る大隈鉄二・日本労働党中央委員会議長

現情勢の特徴をどう見るか

大嶋 新年おめでとうございます。大隈議長 おめでとございます。まできたのか、現状をどう特徴づけたいのかというあたりをお話いただけますか。

大隈議長 いやあ、新年号では必ずインタビューでしょう。昨年は逃れたのかな。でも、三十数年、年末になるとインタビューの準備、秋の十月、十一月頃からいつも悩む。それが終わると今度は新春講演会。まあ、ようやくできたなと思いますよ。

大嶋 よろしくお願いたします。大隈議長 そうですね、複雑な、そして急激な変化なんです。だから、悩むのは当然でしょう。これは、今年ほとんどなインタビューになるのかと、楽しみじゃないな。ヒマヒマヤしてあったんですが、ズバリ、国際情勢をどう特徴づけるか、ということなので、本来は新春講演会で、思っていたんだけど、講演会なら、一週間か十日はある、早すぎましたね(笑)。難しい質問ですが、可能な限りお話ししましょう。

大嶋 それでは、自国の利益を中心に考え、公然と大国的な政治に加わっているわけですね。ときに人民の闘いに支持を寄せようとする必要もある。いわば中間派ですかね。非常に

国際情勢の特徴について

大隈議長 さっきあなたが言ったように、昨年の新春講演会で私は、国際情勢をいろいろ話した後で、世界は米国が衰退する中で、いっそう多極化してきた、しかも、米国が衰退したことによって、いわば帝国主義というか、先進諸国間の力関係が相対化する、そういう意味での多極化とは異なっている。

それは中国の登場とか、ソ連は崩壊したけれどロシアの登場ですね。しかも最近、プーチンも石油代金で元気が良くなっているわけですね。そういうこともあって、いま言った、プーチンのロシアとか胡锦涛ですね。ロシア、中国、そのほか、また国際政治でのプレイヤーはいると思いますが、そういう意味で、情勢は非常に複雑になっています。そんなことを言ったんです。

もちろん、ロシアや中国が帝国主義国というわけではないですが、にもかかわらず、かれらは強くなってきたから、ときに「テロ反対」などと言ってみたり。つまり、世界人民が前進していくことで、とりわけプーチンのような帝国主義、あるいはヨーロッパの大国が困ってくる、世界人民の側にびつたりと立つのかという、なかなかそういうものでもない。ときに帝国主義と妥協して、世界人民の側から見ると、「どっちを向いているんじや」という動きもあるわけですね。

そして、自国の利益を中心に考え、公然と大国的な政治に加わっているわけですね。ときに人民の闘いに支持を寄せようとする必要もある。いわば中間派ですかね。非常に

複雑なんです。だから複雑だけれど、ますますそんな多極化は進むだろう。それにも多極化というのは、世界人民にとって、敵側が割れている、あるいは必ずしも一枚岩ではない、という意味で有利な状況だと。これは人民の力の前進がくり出し、たことでもあるんだ。

だから、その結びのところで私は「どですか、すばらしい情勢だと思いませんか」と言ったんです。

さて、そこであなたの質問。新しい年の情勢あるいは昨一年の変化を通して、この局面を、どんなふう特徴づけるかという質問ですね。

引き続き多極化、つまり米国はいっそう過ぎた一年も衰退した。他国は現状を保ったか、発展し力をつけたんですね。したがって多極化、複雑な多極化のすう勢、この基本的方向は変わらなかったし、いっそうそれが定着したと思えます。

ただ、少しつけ加えなさいか。これは、昨一年を詳細に見ますとね、まず、国際政治で米国の指導力というか、いっそう衰えたんだけれども、注目すべきところは、よくいわれる米国の評価で、「超大国だ」といわれるような場合です。必ず、米

国の軍力が際立って強い国だね。ある意味で、経済がうまくいかなかったりいろいろだけれど、国際政治で指導権を持っているのは、超軍事力があるからだ。他国の追従を許さないようなね。そういう評価が根拠していたんだと思えます。

しかし昨一年を見ましてね、私はこの点でもそうではなく、たというふうには思っています。例えば、イランを口実にロシアの周辺にミサイル防衛(MD)システムを配置しようとする。だけ、プーチンはこれをきちんと拒否して、米国の強引のようだけれども、結局は妥協という譲歩をしています(注一)。

もう一つは、例のヨーロッパ通常戦力(CFE)条約も、プーチンは破棄したわけではないけれども、履行を停止したわけですね。それから、ロシアを中心とした旧ソ連圏が、「テロ問題」を理由にしているけれども、共同の軍事情報をつくりましたしね(注二)。しかも、それを単なる周辺の同盟というだけではない。他の地域に派遣することも言っています。もちろん、昨年一昨年あたりから、中国とね...

大嶋 上海協力機構(SCO)...

大隈議長 それなどを通じての軍事協力もあつたし、総合的な演習もやりましたけど、昨年はそういう意味で際立っていましたね。そういう意味で私は、多極化の情勢というときに、非常に具体的な生きた世界の状況下では、相対化したのではない。この面も取り上げておく必要があると思っています。